

## 論文

## 保育内容指導法「環境」における ESD・SDGs 活動の展開

後藤由美

## 1. 問題と目的

## 1.1 問題背景

近年、子どもを取り巻く環境は大きく変容し、少子高齢化、グローバル化や情報化といった予測困難な時代の中で子どもたちに求められる課題が増えている。教育行政は、2017年に「幼稚園教育要領、小中学校学習指導要領」、2018年には「高等学校学習指導要領」の改訂を行い、「持続可能な社会の創り手」の育成を明記した。「持続可能な社会の創り手」とは、現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む (think globally, act locally) ことで、問題解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指しおこなう学習・教育活動であり、ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育とされている<sup>1)</sup>。ESDとは、「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development)の略であり、現在の世代ニーズを満たすような社会づくりを意味している。これらの課題を自らの問題として捉え、一人一人が自分のできることを考え、実践していくことを身に付け、問題解決に繋がる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していく活動である。

また、2015年ニューヨーク国連本部において、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、その成果文書として「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。アジェンダは、人間、地球および繁栄のための行動計画であり、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標 (SDGs)」である。これらの取り組みは保育実践と研究の有機的連携が重要視されている。そのSDGsの中にある目標4では「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」と明記され、これはESDに深く関わっている。さらに、2019年10月日本ユネスコ国内委員会より、中長期的観点から、我が国のユネスコ活動の方針等についてまとめた「ユネスコ活動の活性化について(建議)」が出された。SDGs達成に向けた、持続可能な開発のための教育 (ESD) の推進における主導的な役割として、SDGsに関する知識を広めるのみならず、「持続可能な社会の創り手」として必要な力を育むというESDの考え方を分かりやすく整理し、共有することの重要性が述べられた。さらに第74回国連総会にて「国連ESDの10年 (DESD)」(2005～2014)及び「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム (GAP)」(2015～2019)の後継として2020年～2030年におけるESDの国際的な実施枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて (ESD for 2030)」が公表された。その中で、国際社会に対し、幼児教育から高等教育、遠隔教育、職業技術教育まで、すべての教育段階において包括的かつ公正な質の高い教育を提供するよう求めるとされた<sup>2)</sup>。これらのことから、SDGs達成の為に、ESDを通じた教育の必要性が伺える。

幼児教育ではESD・SDGsの取組に着目すると白石・加藤 (2016)<sup>3)</sup>らは、幼児教育のESDに

関して「わが国では、小・中学校の教育においてESDの取り組みが積極的に行われているが、幼児期の取り組みは極めて少ない」と指摘している。さらに井上(2008)<sup>4)</sup>の調査によると、保育者へ「持続可能な開発のための教育(ESD)について知っているか」という問いに、幼稚園教員研修では85.7%、保育士研修担当では75%が「全く知らない」、または「ほとんど知らない」と回答している。これらのことから、幼児教育におけるESDの認識が十分とは言い難い。

このような背景を基にESD・SDGs推進に向けたカリキュラム改善や、指導環境、指導方法の改善、教員の養成・研修、安全な学校環境づくりなど教育活動の推進が求められている。無藤ら(2017)<sup>5)</sup>は幼稚園教諭養成課程の構築をする保育内容「環境」の中で、環境の関わる現代的課題としてESDを取り上げている。さらに、モデルカリキュラム「幼児と環境」では、ESDを「乳幼児を取り巻く環境の現代的な特徴と課題」とし、授業における到達目標は、知識基盤社会及び持続可能な開発のための教育(ESD)などの現代的課題と幼児期において身近な環境と関わることの意義について説明できるとしている。さらに、保育内容「環境」とは、領域「環境」の指導に関連する幼児を取り巻く環境や幼児と環境との関わりについて、「幼児と環境」で扱う知識基盤や感性を踏まえ、幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した保育を構想し実現する力を身に着けることを目指す内容となっている。

## 1.2 領域「環境」保育内容指導法「環境」に関する先行研究の成果と課題

佐藤(2020)<sup>6)</sup>は、2017年の「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂、「保育所保育指針」改定では子どもの教育を乳幼児期のみで考えるのではなく、小中高の教育につながる「育むべき力」とはどのような力であるか、そのことを踏まえて幼稚園としてどうあるべきか、そのあり方について検討がなされたとしている。その中で領域「環境」における教育内容についての変遷過程を究明した。その結果、領域「環境」は、幼児の遊びを中心とした生活を基本に、身近な環境に自発的に関わる力を心身ともに育てていき、経験を通して獲得した諸能力を自身に生活に取り入れているという考えが根底に据えられているとした。さらに、昨今の社会状況の変化による幼児の生活体験の不足、基本的な生活習慣や技能が身につけていないことから、身近なものや人と関わりについての指導内容が多く記載されている領域「環境」では、保育者がいかに幼児期にふさわしい環境を考え、設定し、幼児にとっての体験や経験の場を保証していくかが課題だと明記されている。

また、雲財(2019)<sup>7)</sup>は、幼稚園教育要領における領域「環境」に関する研究の動向を明らかにし、国際社会とのつながりの希薄化、比較する力の基礎の育成が重要であるとした。鮫島(2020)<sup>8)</sup>は「自然体験」に着目した「環境」領域を中心とした円滑な幼小接続を見据えた「自然体験」の在り方を明らかにした。これらの課題は、「持続可能な開発のための教育」(以下ESD)の掲げる持続可能な社会づくりを構成する「6つの視点」である構成概念①多様性(いろいろある)②相互性(関わりあっている)③有限性(限りがある)④公平性(一人一人大切に)⑤連携性(力を合わせて)⑥責任制(責任を持って)と、持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」として①批判的に考える力②未来像を予測して計画を立てる力③多面的・総合的に考える力④コミュニケーションを行う力⑤他者と協力する力⑥つながりを尊重する態度⑦進んで参加する態度をESDで目指すこととしている。<sup>9)</sup>

曾我 (2018)<sup>10)</sup> は、ESD は自らの暮らしについて経済・環境・社会・文化の視点から振り返り、持続可能な社会に向けた生活であるのかを考えさせる教育活動としている。また、担当する保育内容演習 (環境) の授業では、子どもの全人的な発達を促すために持続可能性の観点から子どもの身近な環境を捉えることにねらいを置いている。さらに、子どもという自然をホリスティックにケアするために必要な保育について、持続可能性という視座に立ちながら引き続き検討していくことが求められると指摘している。

これらのことから、保育内容指導法「環境」における ESD・SDGs 活動は、子どもを取り巻く社会環境の現代的課題であり、子どもの発達を促すために必要であると考えられる。

### 1.3 研究の目的

このように、持続可能な社会の創り手として必要な力を育む ESD・SDGs 活動は乳幼児期の保育に重要な役割を担っているといえる。本研究では、保育内容指導法「環境」における ESD・SDGs 活動の視点とその有効性を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

以下の方法で論文及び文献を収集し、分析した。論文については「幼児教育」「幼児」「保育」「持続可能」「ESD」「SDGs」をキーワードに、国立情報学研究所 (CiNii Articles) のウェブサイトを検索した。「幼児教育」「持続可能」は 23 件、「幼児教育」「ESD」は 20 件、「幼児教育」「SDGs」は 10 件、「幼児」「持続可能」は 61 件、「幼児」「ESD」は 42 件、「幼児」「SDGs」は 17 件、「保育」「持続可能」は 85 件、「保育」「ESD」は 37 件、「保育」「SDGs」は 20 件であった。表 1 に示す。その中で、「保育内容」「指導法」「環境」の検索件数は 0 件であったため、「領域環境」のキーワードを追加検索し、レビュー対象文献とした。

さらに、先行研究の中でも、2015 年以降の乳幼児を対象とした保育施設での ESD・SDGs 活動の実践研究を抽出した。表 2 に示す。2015 年以降とした理由は、2005 年から 2014 年までを「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」とし、国際的に取り組まれてきた。その後 2015 年からは、「持続可能な開発目標」(SDGs) が採択された。その為、本研究では 2015 年以降の論文に着目することとした。

表 1. レビュー対象文献抽出数

	持続可能	ESD	SDGs
幼児教育	23 件	20 件	10 件
	領域「環境」		
	1 件	1 件	2 件
幼児	持続可能	ESD	SDGs
	61 件	42 件	17 件
保育	持続可能	ESD	SDGs
	85 件	37 件	20 件
	領域「環境」		
	4 件	2 件	3 件

表 2. 実践研究におけるレビュー対象文献

著者	発行年	論文名称	掲載誌
田宮 緑	2016	幼児教育における ESD の意義と可能性：ユネスコスクールの実践検討	静岡大学教育学部研究報告、教科教育学篇
田中公一、小野瀬剛	2019	幼児教育における「Education for Sustainable Development (ESD)」の PDCA サイクルに基づいた具体的実践方法についての研究：気仙沼市の幼稚園における ESD 実践事例	研究紀要青葉 11 (1)
後藤 由美	2019	「子どもの健康と安全」における乳幼児の事故防止につながる安全教育教材の実践—保育施設における ESD・SDGs 活動の一環とした安全教育に着目して	瀬木学園紀要
小野瀬 剛志	2020	幼児教育における ESD の理論と実践に関する一考察：幼稚園教育要領とユネスコスクール認定園の教育実践の考察から	研究紀要青葉 11 (2)
高橋 健司、久保田秀明	2021	生命の価値に触れる自然体験教育の SDGs の視点からの考察～乳幼児期における「食農自然保育」の意義について～	創価大学教育学論集第 73 号
安達仁美、柴崎正典	2021	ユネスコスクール認定幼稚園における ESD 実践 - 領域「環境」との関連に焦点をあてて -	信州大学教育学部研究論集

### 3. 研究結果

先行研究の中から、子どもの活動及び保育施設での活動における実践研究に分類される 6 本を抽出した。

田宮 (2016) は、子ども園におけるユネスコスクールの実践として、テーマを「地域の人・文化・歴史に誇りをもち、世界に開く眼を育成する保育」としプロジェクトと称して年間計画を立て「文化財に関する体験活動」「伝統工芸士とのかわり」「世界にひらく眼の育成」とし寺院との連携、伝統工芸士に節句の由来や人形を飾る意味などを聞いている。また、英語に触れ、運動会には万国旗づくりを行った。また、桜えびを見せてもらい地域の海に関心を持ち、漁港に行き人の営みに触れ、自分の住んでいる町を外から見るといった体験を行った。このプロジェクトでは、子どもたちの自由な発想を基盤にし、活動や遊びの「つながり」が自然で、子どもたちの必要感に基づいた活動や遊び、その中での学びの具体を示し、さらに田宮は、ESD のプロジェクトというまとまりから俯瞰することで、園外保育の意図や園内での活動や遊びの質の評価を比較的容易に行うことができるとしている。

田中ら (2019) は、ESD とは「持続可能な開発のための教育推進会議」で「社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習や活動」10) としており、多角的な視点から取り組むことが可能であるものの、多義的、抽象的であると指摘している。そこで、幼稚園における多義的かつ抽象的な ESD の活動の具体的な実践方法を現場の観察や実践記録

から把握・分析し、保育計画の実践、評価（PDCA サイクル）の実施方法を明らかにしている。

A 幼稚園では、「地域との密接なかかわり

がキーワードとなり、年間計画のなかにも「進んで地域に関わる幼児」「人を大切にする幼児」「ものを大切にする幼児」という目指す幼児の姿があり、年間計画の中に「地域や環境」「人とかかわり」「用具や材料」という文言が随所に盛り込まれている。さらに、実践例として「馬場の浜散策」「漁港見学」「漁協販売会参加」「うみのなつまつり」「無限探検」を園外で行い、「身近なものを使った道具作り」「うみのたからものキーホルダー作り」「うみのいいところをみつけて遊ぼう」「うみのなつまつりごっこ」「無限のうみごっこ」園内活動として取り組んでいた。この活動に参加した保育者3名に振り返りに関する発言をKH Coder にかけて分析した結果、「幼児」を中心に「大切」・「感じる」・「活動」が強調され、「人—地域」「遊び」を中心として「友達」「かかわり」が存在した。このことより、目指す幼児の姿に関連していることを明らかにした。

また、B 幼稚園では「様々な物事に興味や関心をもち、気付いたり考えたりする幼児」「身近な人と思いや考えを伝え合い、共感したり、認め合ったりする幼児」という目指す姿を設定した。年間指導計画では「興味」「表現」という言葉によって反映されている。実践例は、「海の生き物に触ってみよう」「春の親子遠足」「海岸での散策遊び」「夏まつり」「秋の遠足」「栽培活動」が園外保育として行われた。そしてA 幼稚園と同様に保育者3名に振り返りに関する発言をKH Coder にかけて分析した結果、目指す幼児の姿と関連していることを明らかにした。このことから、田中らは、ESD 活動は年間を通して継続的に取り組み、そこに連続性を持たせることや子どもたちの期待感や好奇心を刺激し、振り返りにより、次回に向けて意識を継続させることは特に意識して行わなければならない重要点であると指摘している。

後藤（2019）は、保育施設の持続可能な安全教育の理論的モデルを構築し、安全教育教材開発を行った。①危険を知るでは、子どもたちに安全に関する絵本を読み聞かせする。危険についての教材を作成し、子どもたちと話し合いをする中で「それぞれ危険だと思われる場所」「何が危険なのか」「どうなるのか」を話し合いの中から共有する。自分で発言をし、友達の見聞を聞くことで認識につなげていく。子どもが発言したことを保育者が反復して知らせ、繰り返し唱えることで危険行為や危険箇所を知る。②危険箇所探索、マップ作りでは、クラスを3グループに分け、園内探索をする。実際にその場に行くことで、認識だけでなく視覚にも投げかけていく。保育室に戻ってから、各グループと情報を共有し、マップに危険箇所及び危険要因を示していく。その際、子どもたちに「なぜ、危ないのか」と問いかけることで、思考の機会につなげていく。③園外保育に行き、園周辺の危険箇所を確認していく。安全教育を子どもたちに教材を用いてESD 活動実践の一つとして捉え、これらの一連の活動を整理すると次のことが明らかになった。

- ①危険を知る中ででは、教材を使うことで子どもたちのイメージが共通化することができどのようなことが危険で、その危険を回避するためにはどうしたらよいかを考えるきっかけを作っていた。自分だけでは思いつかない子ども、友達の見聞を聞くことで知ることにつながった。
- ②体験を通して考えるでは、実際に園内を歩いて、思い思いの危険につながる場所を探していった。その際に、①危険を知る中で使用したイラスト教材をイメージしながら「ぶつかるから危ない」「走ると転ぶ」と言いながらマップ作りをしていた。このように実際に、場所とイメージを一致させ

ることで、より理解につながっていったと言える。

- ③実践を通してということで「園外保育」に出かけ、身近な環境の中での危険を探し、行動の見直しをする姿も見られた。

これらのことから、一連の活動として捉え、行うことでより効果があったと言え、持続可能につながっていくと考えられる。

小野瀬（2021）は、2016年から気仙沼市の幼稚園に聞き取り観察を行い、2019年から富谷市の幼稚園の聞き取りを始めた。気仙沼市では「海」をキーワードで構成され、3歳児の魚になりきった海の探検ごっこ、4歳児はホタテや養殖イカダ作成、5歳児は漁港職員に扮して出荷ごっこを行っていた。また、他の園では、食を通して地域社会との関わりを深める保育が行われた。また、高齢者との関わりは富谷市でも行われていたことを明らかにしている。そして、いずれの園においても、保育者は自然環境や周囲の施設、伝統文化や地域の生活など地域の教育資源を見直しながらESDに取り組んでいたことを明らかにしている。

高橋、久保田ら（2021）は、A市B園におけるニワトリ飼育～畑栽培～調理を巡る自給的循環システムに関する、本研究者が行った実践事例をもとに、SDGsのゴールを意識した「食農自然保育」における教育的効果を明らかにしている。その結果「食農自然保育」は「生きること」の学びそのものであり、非認知能力といわれる「社会情動的スキル」が育まれることを示唆した。また、SDGsの目標2「飢餓をなくそう」目標7「エネルギーをみんなに・そしてクリーンに」、目標12「つくる責任・つかう責任」の「持続可能な消費と生産」、目標14「海の豊かさを守ろう」、目標15「陸の豊かさを守ろう」の「生物多様性と生態系の保全」の学びが深めることができ、自然やエネルギーを大切にできる心が育まれることから持続可能な社会をつくるために有用な乳幼児教育法であるとしている。

安達ら（2021）は、ユネスコスクール加盟園において「自然環境を大切にできる心を育む」をテーマに、全園児を対象とした資源回収について考察している。活動内容としては、回収した資源を遊びに活用し作品制作を行い、リサイクル・リユースのみならず、探求心を育みESDと親和性の高い領域「環境」の内容としても位置づくとしている。

以上のことから、ESD活動実践における過程と子どもの発達を促すための持続可能性の観点を捉えると以下のことが明らかとなった。（図1に示す）

- ・子どもたちの自由な発想を基盤にし、活動や遊びの「つながり」が自然で、子どもたちの必要感に基づいた活動や遊び、その中での学びを具体する。
- ・ESD活動は年間を通して継続的に取り組み、そこに連続性を持たせることや子どもたちの期待感や好奇心を刺激し、振り返りにより、次回に向けて意識を継続させることは特に意識して行わなければならない重要点である。
- ・一連の活動として捉え、行うことでより効果があったと言え、持続可能につながっていくと考え

られる。

- ・ ESD 活動実践から子どもの発達を促すために持続可能性の観点・自然やエネルギーを大切にす  
る心が育まれることから持続可能な社会をつくるために有用な乳幼児教育法である

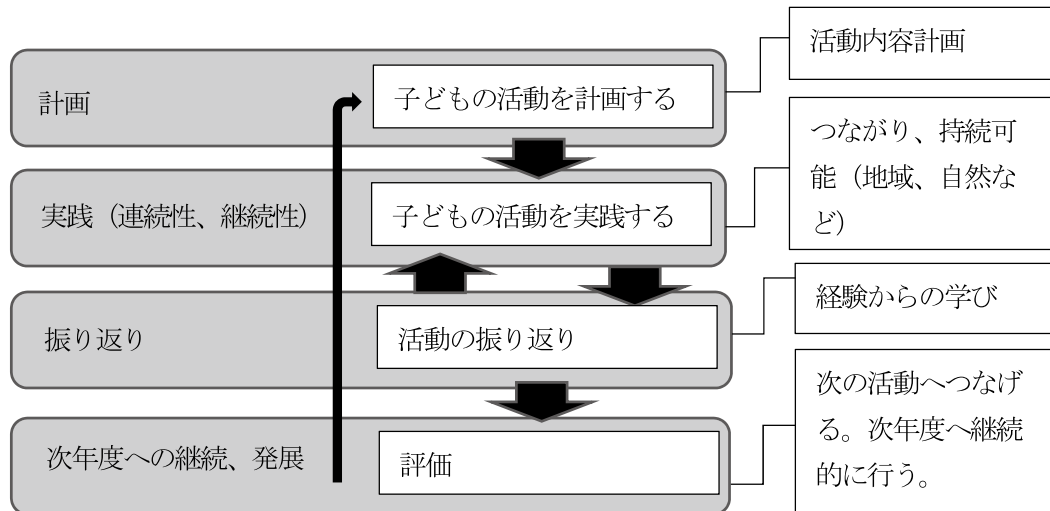


図 1. ESD 活動実践における過程と子どもの発達を促すための持続可能性の観点

#### 4. 考察

これらの結果を踏まえて、保育内容指導法「環境」における ESD・SDGs 活動を考察すると以下のことが明らかとなった。

- ・ 子どもを取り巻く現代的課題の一つとして ESD・SDGs 活動を位置づけ、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動であることを理解し、どのように保育に生かせるかを検討する。
- ・ ESD・SDGs 活動は、子ども達の主体的な活動であり、自由な発想や活動や遊びの「つながり」が大切である。さらに計画的かつ継続的に出来るよう配慮をし、自然環境や周囲の施設、伝統文化や地域の生活など地域の教育資源を見直し活用していく。

#### 5. 今後の課題

予測不可能な社会の中で、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しているため、保育内容指導法「環境」の授業では社会環境を含めた「環境」という視点で子どもたちに伝える必要がある。そのためには、保育者自身が持続可能な社会の創り手の育成とはどのようなことなのかを理解することが重要であるかと考える。本研究では、実践先行研究から「ESD・SDGs 活動」に着目し、活動の過程や体験から得た学びを整理することで、ESD・SDGs 活動の現状が明らかになり、保育者を養成する保育内容指導法「環境」における ESD・SDGs 活動の視点も得られた。今後は、より多くの ESD・SDGs 活動の実践を行うことで、持続可能な社会の創り手を育む一歩としていきたい。

## 【引用文献】

- 1) 2) 文部科学省持続可能のための教育, <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>, 2021.10.16, アクセス
- 3) 白石俣江・加藤望, 幼児期の持続可能な開発のための教育の国際的動向、愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇 第6号, 2016, 63-75
- 4) 井上美智子, 自然との関わりの観点からみた現職保育者研修の実施実態、大阪大谷大学 教育福祉研究 第34号, 2008, 1-6
- 5) 無藤隆代表保育教諭養成課程研究会, 幼稚園教諭養成課程をどう構築するのか〜モデルカリキュラムに基づく提案〜」萌文書林, 2017, 68
- 6) 佐藤純子 (2020) 幼稚園教育要領における領域「環境」の変遷過程に関する研究－教育内容の特質と変容に焦点をあてて－, 淑徳大学短期大学部 研究紀要 第62号, pp. 1-11
- 7) 雲財寛 (2019) 幼稚園教育要領における領域「環境」-研究動向を中心として-, 日本体育大学大学院教育学研究紀要3 (1), pp. 35-44
- 8) 鮫島準一 (2020) 保育指導「環境」領域における「自然体験」の構想:小学校「生活科」「理科」との接続を見据えて, 鹿児島国際大学福祉社会学部論集 第38巻 第4号, pp. 1-16
- 9) 角屋重樹 (2012) 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究〔最終報告書〕 pp. 4-9
- 10) 曾我幸代 (2018) 問い, ともにいるESD- 保育内容演習 (環境) でのアニメーション作品『キートスのりんごの木』を使った授業実践をもとに-, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』29号, pp27-pp45

## 【参考文献】

- ・谷口一也 (2020) SDGs時代の幼稚園教育要領「環境」のあり方, 教育総合研究叢書
- ・玉村公二彦、竹内範子、長谷川かおり、木村公美、清水智佳子、原田真智子、川渕洋子、大原千晶、中澤静夫、石田正樹 (2013) 持続可能な社会に向けた幼児教育実践の試み - 知的発達を啓培する体験活動の検討 -, 教育実践開発研究センター研究紀要
- ・大島光代、斎藤正和、想厨子伸子、林麗子、脇田町子 (2018) 保育者・教員養成機関大学における地域発信としての「みどりの子ども会」の実践と考察 -ESD (Education for Sustainable Development) をテーマにした幼児向けイベント事業の展開を通して-, 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要 第11号
- ・曾我幸代 (2016) 持続可能な社会の形成に向けた幼児教育に関する一考察 - 「人間存在を深める」子どもの遊びに着目して -, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』
- ・持続可能な開発のための教育推進会議 HP, ESDとは, <https://www.esd-j.org/>, 2021, 10. 16 アクセス



## Development of ESD/SDGs Activities Related to the Childcare and Educations Seminar “Environment”

Goto, Yumi\*

近年、子どもを取り巻く環境は大きく変容し、少子高齢化、グローバル化や情報化といった急速で予測困難な時代の中で子どもたちに求められる課題が増えている。2017年に「幼稚園教育要領、小中学校学習指導要領」、2018年には高等学校学習指導要領の改訂を行い、「持続可能な社会の創り手」の育成を明記した。持続可能な社会の創り手として必要な力を育むESD・SDGs活動は乳幼児期の保育に重要な役割を担っているといえる。そこで本研究では、保育者養成校における授業科目である保育内容指導法「環境」においてESD・SDGs活動の視点とその有効性を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

- ・子どもを取り巻く現代的課題の一つとしてESD・SDGs活動を位置づけ、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動であることを理解し、どのように保育に生かせるかを検討する。
- ・ESD・SDGs活動は、子ども達の主体的な活動であり、自由な発想や活動や遊びの「つながり」が大切である。さらに計画的かつ継続的に行えるよう配慮をし、自然環境や周囲の施設、伝統文化や地域の生活など地域の教育資源を見直し活用していく。

以上の結果を踏まえ、保育指導法「環境」におけるESD・SDGs活動の新たな展開を期待するとともに、より多くのESD・SDGs活動の実践を行うことで、持続可能な社会の創り手を育む一歩としていきたい。

キーワード：保育内容指導法「環境」、乳幼児、ESD・SDGs活動

